曹植「贈丁儀」詩小考

柳川　順子

魏文帝曹丕とその弟曹植との間には、かつて父曹操の後継者の座をめぐって熾烈な争いが繰り広げられた。ただ、その争いは、本人たちどうしの対峙というよりも、二人を取り巻く人々の権力闘争と言った方が適切である、との見方が今大方の認めるところとなっている(1)。この説の中核に位置しているのは伊藤正文氏の所論であるが、これによってより明確に言うならば、長子である曹丕の継承が順当とされていたところへ、曹操に寵愛されている曹植を担ぎ上げて王位奪取を目論む者たちが現れ、これに曹丕側が応戦したというのが実情であったという見方である(2)。だが、本当にそのように言い切ることができるだろうか。そう疑問を投げかけてくる作品の一つに、曹植の「贈丁儀」詩（『文選』巻二十四）がある。

この曹植の詩は、丁儀という特定の相手に贈られた作品である。そして、丁儀といえば、曹氏兄弟の後継者争いを引き起こした張本人の一人である。しかも、その詠じられた内容には、現実と地続きの部分が多分に含まれているように感受される。だとすれば、本作品は、前述の後継者問題を論ずる上で、第一級の資料たり得ると言えるだろう。そこには、第三者の記した歴史書からは窺い知れない、曹植という一個人の内的真実が詠出されているはずだ。それをこそ本稿では探り出したい。そこで、複数の説が行われている本作品の成立時期について、筆者なりの推定を試みることから考察を始めよう。この基礎的作業なくしては、本詩に詠じられた曹植の心情も、現実から遊離したところで解釈せざるを得なくなるからだ。

一

曹植「贈丁儀」詩の成立時期を確定する上で、一つの有力な糸口となるのがその独特の季節描写である。まず、本詩の全文を示しておこう。

初秋涼気発　初秋の季節、涼やかな気が生じて、
庭樹微銷落　庭の樹木は、その葉をわずかに落とし始めた。
凝霜依玉除　やがて、凝結した霜が玉作りの階を覆い、
清風飄飛閣　清冽な風が翻って、聳え立つ高楼に吹き付ける。
朝雲不帰山　例年になく、朝に出た雲が山に帰らず、
霖雨成川沢　そのために長く降り続いた雨が、川や水たまりとなっている。
黍稷委疇隴　実らなかった黍や稷は畑の中に打ち捨てられて、
農夫安所獲　農夫はいったい何を収穫すればよいのだ。
在貴多忘賤　高位にある者は、とかく卑賤なる者の存在を打ち忘れ、
為恩誰能博　広く分け隔てなく恩沢を施すことは、誰にもできはしないのだ。
狐白足禦冬　狐白裘は十分に冬の寒気を防げるだろうが、
焉念無衣客　そんな人間が、衣もない旅人のことなどどうして思いやるだろうか。
思慕延陵子　かの延陵の季子を思い慕う私は、
宝剣非所惜　かつて身に帯びていた宝剣を、望む者に惜しみなく与えるのだ。

子其寧爾心　だから君よ、どうかその心持を安らかに保ってくれ。
親交義不薄　私たちの親しい交わりは、薄からぬ情義で結ばれているのだから。」

見てのとおり、この詩の背景を為すのは秋の季節である。冒頭四句に描かれる、初秋の冷気に落葉し始める庭の木々や、やがて霜に覆われ、寒風にさらされて凍てついてゆく宮殿。この光景はまだ、眼前に展開する深まる秋の景観をもとに、この季節にまつわる凋落の伝統的イメージを踏襲して詠じたものだと言えるかもしれない。だが、続く四句に入ると、長雨が続いて、穀物の収穫が見込めない農村の様子が詠じられ、それは純然たる風景描写とは言い切れない雰囲気を醸し出し始める。というのは、この時代、天候の不順は為政者の失策と結びつけられて解釈されたからである。

まず、「霖雨　川沢を成す」という異常な長雨は、それ自体が不安定な世の中を象徴するものと見られていたようだ。このことは、平野園子氏の所論が、『漢書』巻二十七上・五行志上、『三国志』巻二十五・高堂隆伝を引いて指摘しているが(3)、筆者も一つこれに付け加えよう。京房の『易候』(『初学記』巻二）に次のようにいう。

太平之時、十日一雨、凡歳三十六雨。此休徴時若之応（太平の時には、十日に一たび雨ふり、凡そ歳に三十六たび雨ふる。此れ休徴時若の応なり）。

つまり、太平の世においては、それに対応して、晴雨の天候が規則正しい周期で循環するというのである。だとすれば、不順な気象は、人の世の乱れに応じて起こったものだということになるだろう。京房の易学は、この時代広く行われており、『漢書』『続漢書』の五行志などには頻出するし、後漢の郎宗、度尚、崔瑗、劉寛、杜喬、鄭玄らのように、その学を学んだ知識人も少なくない。すると、上記のような認識は、当時の常識であったと言ってよいだろう。

更に、この秋の長雨の直接的な原因は「朝雲　山に帰らず」であったが、当時の人々は、朝に生じた雲は、暮れに

は山へ帰ってゆくものだと考えていたらしい。一例として、曹氏兄弟を取り巻く文人の一人であった応瑒の「別詩」（『藝文類聚』巻二十九）に次のようにいう(4)。

朝雲浮四海　朝の雲は、広く四海の上空に浮かんで広がるが、
日暮帰故山　日が暮れる頃には馴染みの山に帰ってゆく。そすｒれなのに、
行役懐旧土　行役に従事する私は遠い故郷を懐かしみ、
悲思不能言　悲しい思いに胸が詰まってものを言うこともできない。
悠悠渉千里　はるばると千里の道のりを越えてゆき、
未知何時旋　いつになったら帰れるのかも知れはしない。

ところが、この雲が山に帰らない。そして、それに起因して降る雨は、地表を這いまわって流れる大水と化すのである。

それでは、このような異常気象はなぜ起きたのか。この問題について、『広雅』釈天「月行九道」の条は(5)、面白い示唆を与えてくれる。

正月不温、七月不涼。二月不風、八月雷不蔵。……八月浮雲不帰、二月雷不行。……（正月に温かからずんば、七月に涼しからず。二月に風あらずんば、八月に雷蔵れず。……八月に浮雲帰らずんば、二月に雷行かず。……）。

そして、これに類似する記述が、『淮南子』時則訓にも次のように見えている(6)。

正月失政、七月涼風不至。二月失政、八月雷不蔵。……八月失政、二月雷不発。……（正月に失政あらば、七月に涼風至らず。二月に失政あらば、八月に雷蔵れず。……八月に失政あらば、二月に雷発せず。……）

つまり、天候の異変は、その半年前の出来事に起因しているというのである。『淮南子』ではそれが為政者の過ちと強

く結び付けられ、『広雅』ではそれが希薄であるという違いはあるが、半年を隔てて相応ずる時期の事象の間に、何らかの因果関係を読み取ろうとしていることでは一致している。こうした発想もまた、当時においては常識であっただろう。ならば、曹植の詩にいう山に帰らぬ朝雲と秋の長雨は、その背後に半年前の出来事が関連付けられている可能性が高い。

こうしてみると、「農夫は安んぞ穫る所ぞ」という曹植の怒りは、ただ天を仰いでその不条理を嘆いているのではなく、そうした自然界の異変を引き起こした人間界の出来事にこそ向けられたものであると見ることができるだろう。ここに描かれているのは、純然たる実景ではない。その叙景の向こう側に、人の世の過ちを指し示そうとしているのである。

それでは、この詩が成ったのはいつだろう。結論から言えば、おそらくそれは延康元年（二二〇）の秋ではあるまいか。『魏略』五行志（『初学記』巻二）に、次のような記述が見えている。

延康元年、大霖雨五十余日。魏有天下乃霽。将受大禅之応也（延康元年、大いに霖雨あること五十余日。魏の天下を有するや乃ち霽る。将に大禅を受けんとするの応なり）。

魏が後漢から受禅するのはこの年の冬十月であり、その予兆として長雨が上がって晴天が現れたというのであるから、雨が五十日余り降り続いたのはその直前の秋であり、それはちょうど曹植詩に詠じられていた季節と重なっている。そして、この時期から約半年を遡った春二月、前の月に亡くなった曹操の跡を継いで、曹丕が魏王に即位している。前掲の『淮南子』や『広雅』に示された発想に即して言うならば、同年秋の長雨は、この曹丕の即位という人事によって引き起こされた異常気象だと見ることもできるだろう。

とはいえ、雨は何もこの年の秋にばかり降り続いたわけではない。たとえば、先にも言及した応瑒には「愁霖賦」

（『藝文類聚』巻二）と題する作品があり、同題の賦が曹丕や曹植にもあって、同時期に競作されたものである可能性も疑われるのだが、応瑒は建安二十二年（二一七）に没しているので、少なくともこの賦に詠じられた長雨は、紛れもなく曹操在世当時の出来事である。とすると、「霖雨」の一事のみを根拠として、この詩の成立年代を確定することはできないと言わなくてはならない。だが、それでもこの詩に言及された長雨は、曹操の没後、延康元年の秋と見ることが最も妥当であると筆者は考える(7)。なぜか。その理由は以下の章で述べてゆきたい。

二

曹植の「贈丁儀」詩に詠じられた秋の長雨は、その背後に為政者への批判を蔵しているのではないか。そう前章では論じたが、この推測は、続く四句に入ると益々その蓋然性を高めてゆく。いわく、高貴な位にある者が、微賤なる者に恩沢を広く施すこともせず、狐のわきの下の白い柔毛で作った上質な衣に身を包み、そうした地位にぬくぬくと安住しながら、寒さに打ち震える寄る辺なき境遇の者に思いを致すこともしない、と。このむき出しの非難は、一般論を述べたに過ぎないと片付けてしまうにはあまりにもリアルだ。しかも、この段に至るまでには、前章で指摘したような複数の伏線が縦横に張り巡らされているのである。ここはやはり、ある特定の人物を指して発せられた批判と見るのが妥当だろう。では、その矛先は誰に向けられたものなのか。

まず、後漢の献帝ではあり得ない。皇位が魏王曹丕に禅譲される二二〇年十月までは、漢王室は曲がりなりにも存続していたが、曹操が彼を許都に迎え入れて奉戴した建安元年（一九六）以降、夙にその影響力はほとんど無化されていたからだ。それでは、批判の対象は曹操なのだろうか。先に筆者は、この詩の成立時期を曹操没後の延康元年秋

と推定したが、実は、この問題については別の見方をする論もあって、その説が是であるならば、そうした解釈をせざるを得なくなるのだ。

その是非を検証するために、本詩の成立を曹操の存命中と見る説をここで概略紹介しておこう。一つは、下文に見える「延陵子を思慕す」の一句に依拠して、本詩を兄曹丕との王位継承問題と結び付けて解釈する説である。「延陵子」とは、延陵（今の江蘇省常州市）に封ぜられた、春秋呉の王子季札。同母兄弟四人の最年少でありながら、父の跡継ぎに立てられそうになったのを固辞し、長兄に王位を譲ったという逸話の持ち主である（『史記』呉太白世家、劉向『新序』節士篇）。この逸話と曹氏兄弟の跡継ぎ問題との類似点に着目し、曹植と季札とを重ね合わせて見るこの説は、本詩の成立を、曹丕が太子に立てられた建安二十二年（二一七）かそれ以前のことと見る(8)。

これに近い結論を導き出しているもう一つの説は、『三国志』巻十九・陳思王曹植伝の記述に依拠するものだ。まず、本伝には、丁氏兄弟の誅殺、曹植らの各封国への赴任という順番で記されている。他方、曹植が封国鄄城から奉ったと思われる「求祭先王表」（『太平御覧』巻五二六）に、「夏節方到（夏節は方に到らんとす）」「計先王崩来、未能半歳（計するに先王の崩じてより来、未だ半歳に能ばず）」とあって、その鄄城への赴任は夏であったことが知られる。だとすると、丁氏兄弟の誅殺はそれよりも前でなければならない。よって、丁儀に贈られた本詩の成立もまたそれ以前、すなわち、建安二十三年かその翌年の初秋であろうと推定される、と(9)。

もしこれらの説を是とするならば、曹植の批判の矛先は曹操に向かっていることになる。この時点で、曹丕は既に太子に立てられていたとはいえ、人々に広く恩恵を施し得る力は未だその手中に収めてはいないはずであって(10)、いきおいその詩にいう高貴な地位にある者とは、当時の魏王、曹操を指すことになるのである(11)。しかし、曹植が曹操に批判的であった可能性はほとんど無いと見てよいだろう。というのは、曹植は父を失望させる数々の愚行を繰

り返しながらも、その曹操に対する思慕には揺るぎないものがあると感受されるからだ。たとえば、未だ志を得ない憂悶の内にある王粲を慰めた「贈王粲」詩（『文選』巻二十四）には、「重陰潤万物、何懼沢不周（重陰は万物を潤す、何ぞ沢の周からざるを懼れんや）」という句が見え、ここにいう万物に遍く恵みの雨をもたらす分厚い雲とは、明らかに時の実力者曹操を指している。そして、この曹操に、曹植は衷心からの敬愛を以て帰依し、やがて曹操から王粲に与えられるであろう恵みを信じて彼を慰撫しているのである。曹操に対する曹植のこの絶対的な尊崇は、跡継ぎ問題の結論ともほとんど関わりなく、もちろん曹操の死後も変移してゆくことはなかった。彼が、曹丕の受禅の知らせを聞いて号泣したのも、その父の恩愛に報いることができなかった自らの不甲斐なさを痛恨するが故にであったと、同時代の歴史家、魚豢は記しているし（『三国志』巻十六・蘇則伝裴注引『魏略』）、先にも言及した曹植の「求祭先王表」を見ても、亡き父を祭らんことを願い出るその言葉は切実で、これを虚飾かと疑わせる余地もない。

こうしてみてくると、本詩の成立を曹操存命当時と推定し、その為政者批判が、曹操に向けられたものであると見ることには無理があると言わざるを得ない。太子時代の曹丕と見ることも同様だ。やはり本詩は、曹丕が魏王に在位していた延康元年の秋、この新しい為政者への憤懣を蔵しつつ、かつての腹心、丁儀に贈られたものと見るのが最も妥当である。

とはいえ、この説にも腑に落ちないところがある。それは、この時期、曹植と丁儀とは接点を持ち得る境遇にあっただろうかという疑問である。建安二十五年（二二〇）一月二十三日、曹操が洛陽で崩御すると、鄴にいた曹丕は直ちに王位を継いで、年号を延康元年と改めた。そして、二月二十一日、曹操を高陵（鄴の西郊）に葬ると、兄弟たちを各封国へ赴かせた。その命令には有無を言わせぬものがあったらしく、たとえば、先王の時代に武勲を挙げた曹彰（曹丕の弟、曹植の兄）は特別扱いを期待したが、願いは聞き入れられなかったという（『三国志』巻十九・任城威王

曹彰伝裴注引『魏略』)。だとすると、曹植もまた早い時期に鄴の都を去って領国に赴いたと考えるべきだろう。前掲の「求祭先王表」にいう「臣欲祭先王於北河之上(臣は先王を北河の上に祭らんことを欲す)」により、この年の夏、曹植が鄄城に封じられていたと見る説もある(12)。ただ、『三国志』曹植伝には、前述のとおり丁氏兄弟の殺害が曹植らの封国への赴任に先んじて記されている。全ての事実が本伝に記され、なおかつ記述の配列も正確であると見るならば、この年の秋、丁儀はすでにこの世にいない計算になるのだが、これだって後述するとおり、ある歴史書に記された事実とはかみ合わないのだ。凡そ錯乱や遺漏のない記述というものはあり得ない。最後に拠るべきは、本人の書き記した言葉であろう。それでさえ事実を記しているとは限らない。ただひとつ確かなのは、そこには本人にとって紛れもない真実が刻まれているだろうということだけだ。

筆者は、ここまで述べてきたような論拠により、曹植のこの詩を、延康元年の秋、丁儀に書き贈ったものだと推定する。そして、曹植らに対する曹丕の処遇が当時すでにかくも冷厳なものであったとすれば、曹植と丁儀とが従前に変わりない親密な間柄を保持し得ていたとは到底思えない。もし本稿の推定が正しいならば、この詩に記された曹植の言葉は、このような切迫した状況下で発せられたものだと受けとめる必要がある。

三

曹植の「贈丁儀」詩に開陳される苛烈な為政者批判は、魏王となった曹丕に向けられたものだと筆者は考える。そこで、曹植の目に映じていたであろうこの時期の曹丕の所業を、主に『三国志』とその裴松之注に引く諸文献によってたどっておこう。更に、そのようなふるまいに出た曹丕の為人についても、筆者なりの考察を試みたい。

まず、幾らか遡った時期になるが、曹丕が父の後継者になりたいと強く望んだことは確かであると言ってよい。未だその地位が確定していなかった時期、彼はその願望を実現しようとして、実に様々な人々に援助を求めている。たとえば、かつてその首領張繡と共に曹操に帰順し、今や曹魏政権の知恵袋的存在となっている賈詡に、わざわざ人を遣って太子に立てられるための方策を問わせ(巻十・賈詡伝)、秀でた文才を持つ曹植への劣等感に打ち萎れた折には、腹心呉質から、ただ涙を流して誠心を示せばよいのだとの助言を受けている（王粲伝附呉質伝裴注引『世語』）。この他にも、曹丕がその言葉に耳を傾けた人物として、彼が礼を曲げて仕えたという荀彧（巻十・荀彧伝）、曹操の不在時には常にその教育係を務めた張範と邴原（巻十一・張範伝）、曹操の馬超討伐時、鄴を留守していた曹丕の参謀であった程昱（巻十四・程昱伝裴注引『魏書』）、曹操の并州討伐時、鄴に留まってその教育係を務めた崔琰（巻十二・崔琰伝）、五官中郎将時代の補佐役を務めた常林（巻二十三・常林伝）、更には人相見の高元呂（巻二・文帝紀裴注引『魏略』）などを挙げることができる。曹丕が比較的素直に彼らの意見に従ったのは、父魏王の後継者という地位を獲得したいと切望していたからに他なるまい。一方、その母と共に曹操の庇護を受けていた何晏を、無遠慮に太子同然の身なりをしているという理由でひどく悪み、いつも名前ではなく養子と呼んでいた（巻九・曹真伝附何晏伝裴注引『魏略』）というのも、彼のその地位への執着の強さを物語るエピソードである。

為政者たらんことを切望した曹丕は、亡父の跡を継いで魏王に即位すると、その当初は比較的真っ当な政事を行おうとしたようである。たとえば、延康元年二月四日の令には、関所などの税金の減免、池などにかかる禁令の軽減を命じ、翌日には、諸侯以下大将まで、食料や絹、金銀などを下賜し、また、使者を巡行させて各地の暴徒を検挙させている（文帝紀裴注引『魏書』）。同年秋七月六日に発せられた、広く人々の意見を聴取すると宣言する令や、同年冬十月一日の、戦死者たちの遺体を小棺に納めて家に送り届け、公に葬礼を行うとの発令（いずれも文帝紀）には、父

曹操や漢の高祖劉邦の面影が重なって見えてくるようだ。

だが、彼らと曹丕とは器が違う。魏王曹丕の政事には、私心に発するものが非常に目立つのである。たとえば、延康元年夏四月十二日、饒安県から白い雉が出現したとの報告があると、これに対して、饒安県には田租を、その管轄下の渤海郡には牛や酒を下賜し、三日間大いに酒盛りをすることを許した。また、同年七月二十日、生まれ故郷の譙に駐屯した折には、盛大に宴を設けて伎楽百戯を披露させ、六軍及び譙の父老百姓らをもてなした上に、この地の租税を二年間免除するとの令を発したという（以上、文帝紀及びその裴注引『魏書』）。恵みが局所にしか及ばないこうした恩沢など、長期的には国家を疲弊させる一因にさえなりかねないように思うが、曹丕にとっては、自らの統治を祝福してくれるものに報いることの方が重大事であったのだろう。

人事もまた同様である。曹丕は、かつて世話になった人物、あるいは自分に恭順の姿勢を示す者には手厚い待遇を与えた。先にも言及した賈詡がその筆頭に挙げられるが、彼を三公に登用したことについては、敵国呉の孫権に嘲笑されたと、後に西晋の荀勗が述べている（賈詡伝裴注引『荀勗別伝』）。この他、曹操の崩御後、いち早く太子曹丕を魏王に即位させようと動いた陳矯（巻二十二・陳矯伝）、曹丕が魏王に即位すると、すぐに部曲四千余家を率いて帰順した孟達（巻三・明帝紀裴注引『魏略』、巻十四・劉曄伝）、曹丕の船が転覆しそうになった時、真っ先に駆けつけた徐宣（巻二十二・徐宣伝）、一捻りした言葉で曹丕の受禅を寿いだ陳羣（巻十三・華歆伝裴注引『華嶠譜敘』）などは、曹丕の覚えがめでたかった人々である。

その一方で、かつて自分を軽視した、あるいは今自分の意向に従おうとしない人物は、情け容赦なくこれを切り捨てていった。たとえば、曹丕が魏王に即位して半年も経っていない延康元年六月、南方への出征に際して、度支中郎将の霍性が上疏して諫めたところ、王の怒りを買い、刺奸の取り調べを受けた末に殺されるという事件が起こってい

る（文帝紀、及びその裴注引『魏略』）。その直後に当たる七月六日に、先にも言及したとおり、広範な人々からの意見聴取を宣言する令が発布されているが、これではほとんど上辺だけの取り繕いにしか思えない。この他にも、曹丕に嫌われ、冷遇されたり抹殺されたりした人物として、魏王時代、たびたびの狩猟を諫めた長水校尉の戴陵（文帝紀）、かつて曹植と親しく交際し、自分をないがしろにした孔桂（明帝紀裴注引『魏略』）、裕福でありながら吝嗇で、要求に応じてくれなかった同族の曹洪（巻九・曹洪伝）、自分と親しい夏侯尚と不仲である荀惲（荀彧伝）、郭夫人の弟の罪を見逃してくれず、また、庭園の造営や狩猟を厳しく諫めた鮑勛（巻十二・鮑勛伝）、正論を吐く正統派音楽家の杜夔（巻二十九・方技伝）などが挙げられる。いずれも、排斥された理由は実に私的である。

だが、曹丕は別のある一面で、非常に心の優しい人間でもあった。たとえば、愛息曹沖を亡くしてひどく嘆き哀しんでいた曹操を慰めたのは彼であったし（巻二十・鄧哀王曹沖伝）、突出した才能を持つ少年、周不疑を殺そうとした曹操を諫めたのも彼である（巻六・劉表伝裴注引『零陵先賢伝』）。また、五歳にして父を亡くし、兄である自分を「阿翁（おとうちゃん）」と呼ぶ弟の幹に対して、曹丕はいつも特別な慈愛を注いだという（巻二十・趙王曹幹伝裴注引『魏略』）。ただし、幹の母は曹操の寵愛を受けており、曹丕が太子に立てられたのには、彼女の力が大きく与っていたともいう（趙王曹幹伝）。曹丕が幼い幹を慈しんだのは、その母の恩義に報いるためでもあったのかもしれない。

こうした曹丕の情愛深さは、一見したところ前述のごとき暴君ぶりと相矛盾するかのように感じられよう。だが、そうではあるまい。思うに、曹丕は情に脆い、つまり別の視点から見れば、理知的に弱い人間だったのではないだろうか。弱いからこそ、たやすく情にほだされ、私的な好悪の感情を、公の大事にまで持ち込んでくる。また、自分の弱さを漠然と感じているが故に、脅威を与えてくる者に対しては、徹底的にこれを抹消しないではいられない。漢王朝からの受禅の知らせを聞いて曹植が号泣したことを恨みに思い、左右の者たちに、「人の心は同じでないものだ。私

が皇位に登った時、天下に哭する者がいた」などと嫌味を言ったのも（巻十六・蘇則伝裴注引『魏略』）、彼がいかに小心者であったか、その自信のなさを露呈させる逸話である。もっとも、曹丕自身にはそうした自覚はなかったであろうが。

さて、曹植が詩を贈った丁儀もまた、才能豊かな曹植を曹操の後継者として強く推した者の一人であった。父丁沖は、曹操に天子奉戴を示唆した人物。また、曹操はかつてその愛娘を丁儀に娶わせようとしたことがあったが、曹丕が難癖を付けたために沙汰止みとなり、丁儀はこれを恨みに思ったという経緯もある。彼が曹植を推したのには、このような伏線もあったらしい。その後、王位に就いた曹丕は、丁儀を処罰しようとして、右刺姦掾に転任させ、自殺するように仕向けたが、丁儀にはそれができず、中領軍の夏侯尚に叩頭して哀願したが、曹丕と親しい夏侯尚にも彼を救うことはできなかった。かくして彼は、職務上のことに因って投獄され、殺されたと、同時代資料である『魏略』（曹植伝裴注引）は記す。

ここに言及された夏侯尚は、曹丕が魏王に即位すると、まず散騎常侍に拝せられ、次に中領軍に移り、曹丕が受禅して後には征南将軍に転任している。とすると、窮地に追い込まれた丁儀が夏侯尚に泣きついたのは、曹丕が魏王に在位した延康元年の後半と見てよいだろう。秋は、古来処刑が執行される季節である。丁儀らと共に曹植の羽翼を為していた楊修の刑死も、この一年前の秋であった。曹植の「贈丁儀」詩には秋の景色が詠じられていたから、もし前述のとおり、本詩の制作時期がこの年であるならば、丁儀の死は、もう目前に迫っていたということになる。

四

目前に迫る死を察知しておののく丁儀に対して、曹植はどのような言葉を贈っているのであったか。彼に直接語りかける、結びの四句は読みづらい。それでも、後ろの二句「子は其れ爾の心を寧んぜよ。親交　義は薄からず」は、文字どおり取って、少なくともその意味だけは通じる。わかりにくいのは、その直前に示された「延陵子を思慕すれば、宝剣は惜しむ所に非ず」だ。「延陵子」が王位継承を辞退した人物であることは先にも述べたとおりだが、この延陵の季子が「宝剣」を惜しみなく人に与えた話はまた別である。今、劉向の『新序』節士篇によって、その大筋を紹介しよう。

延陵の季子は、使者として晋へ赴く途上、宝剣を帯びて徐の君主を訪ねた折、徐君が内心その宝剣を欲しがっているのを察したが、公務を果たした後にこれを献上しようと心に決めた。晋からの帰途、再び徐君を訪ねたところ、彼はすでに楚で亡くなっていた。そこで、剣を嗣君に渡そうとしたが、従者に止められ、やむを得ず、その墓に植わっていた樹に掛けて立ち去った。

以上がその骨子であるが、この話の筋と本詩との間に接点を見出すことは難しい。そこで、改めて本文中に見える季子自身の言葉を見てみよう。彼は、「此呉国之宝、非所以贈也（此れは呉国の宝にして、以て贈る所に非ざるなり）」と諫める従者に対して次のようにいう。

吾非贈之也。先日吾来、徐君観吾剣、不言而其色欲之。吾為有上国之使、未献也。雖然吾心許之矣。今死而不進、是欺心也。愛剣偽心、廉者不為也（吾は之を贈るに非ざるなり。先日吾来りしとき、徐君は吾が剣を観て、言はざるも其の色は之を欲す。吾は国に上るの使ひ有るが為に、未だ献ぜざるなり。然りと雖ども吾は心に之を許す。今死せりとして進ぜずんば、是れ心を欺くなり。剣を愛して心を偽るは、廉者は為さざるなり）。

曹植詩に見えていた「宝剣非所惜」の「惜」は、ここにいう「愛剣偽心」の「愛」と同義である。だとすると、宝剣

を惜しむとは、「剣を愛す」、すなわち「心を偽る」ということに等しく、宝剣を惜しまないというのであれば、それは、心を偽ることはない、つまり自らの心に忠実に、ひとたび心に決めたことは信義を通して守り抜くのだと言っていることになるだろう。曹植は、この誠心を以て、戦慄する丁儀を、心安らかにあれと慰撫しているのである。

それでは、曹植が心に決めたこととは何だろう。それは何よりもまず、結びに示された「親交義不薄」であるには違いない。かつて深い親交を結んだ丁儀への、変わることのない信義である。とはいえ、ここで具体的に示された「宝剣」という語の存在感はあまりにも大きい。それは、権力というもののイメージを強く帯びているように感受されるのだ。たとえば、彼の「野田黄雀行」(『楽府詩集』巻三十九)には、網羅に捕らえられた雀を見て悲しんだ少年が、「利剣」を抜き、網羅を切り払って雀を逃すというシーンが描かれている。この剣は、自らが大切に思う者の窮地を救う力、要するに権力の象徴に他なるまい。ところが、同詩の前半には、同じ「利剣」が次のように詠じられている。

利剣不在掌　　鋭い剣がこの手にない以上、
結友何須多　　交友関係を結んでも、私に多くのことは期待できないのだ。

一篇の詩に走るこの亀裂をどう見るか。大上正美氏は、後半に詠じられた利剣を、現実には部下たちを救えない曹植の仮構と論じ、そこにこの詩人の悲劇性を見ている(13)。筆者もこの解釈に賛同したい。この詩の中の曹植は、自らの手に権力がないことを知っている。そしてなおかつ、何ものにも打ち負かされない権力を振るって、大切に思う者を救い出した自分の姿を強く思い描いているのだ。「贈丁儀」詩に詠じられた「宝剣」のイメージも、ここにいう「利剣」と全く無関係ではあり得ない。ところが、かの詩では、この「宝剣」が「惜しむ所に非ず」とされていたのであった。先に示したとおり、『新序』を踏まえて読むならば、この句は「心を偽らず」の意味が前面に出るだろう。それは、丁儀に対する変わらぬ信義である。ところが、「野田黄雀行」にも鮮明なとおり、剣というものが喚起する圧倒的

イメージは権力である。これを放棄するとなれば、丁儀への厚い信義も、現実において貫徹することはできないのだ。

思うに、この当時の曹植には、剣が象徴する権力者というものへの、拭い去り難い嫌悪感がまずあったのではないだろうか。具体的な出来事として、曹丕は魏王に即位する前年（二一九）の二月、「百辟の宝剣、長さ四尺二寸」を作っている（『文選』巻三十五、張協「七命」の李善注、及び『藝文類聚』巻六十に引く『典論』）。また、いくらか時期的には下るし、史実であるかも不確かな逸話ではあるが、楊修の才能を愛していた曹丕は、楊修が誅殺されて後、彼を追想して、その遺品である「宝剣」を身に帯び、左右の者たちに「此れ楊修の剣なり」と告げたという（『藝文類聚』巻六十、及び『北堂書鈔』巻一二二に引く『文士伝』）。このように、「宝剣」には権力を手にした者独特の臭みが纏わりついていた。それゆえに曹植は、これを振り払うべく「宝剣は惜しむ所に非ず」と詠じたのだろう。それはおそらく、「権力など、これを欲しがる者にくれてやる」という科白と同義であったのだ。

曹植には、兄曹丕の底意が見極めきれていなかった。結びにいう「親交義不薄」は、丁儀に対する信義の表明であると同時に、自分と曹丕との関係に対する根拠のない自信をも示しているだろう。曹丕との信頼関係なしには、丁儀の命も請け負えないのであるから。「親交」という語自体も、親しい交友関係を言うほかに、肉親どうしの親密な交わりという意味も持つ(14)。もしかしたら曹植は、為政者となった兄曹丕にあれだけ手厳しい批判の言葉を浴びせておきながら、どこかでそれを許容範囲内と見積もっていたのかもしれない。だが、結果として、曹植は丁儀を救えなかった。これは、彼にとって幾重にも重なる失意であっただろう。肝胆相照らす仲であった親友を失い、揺るぎない兄弟愛で結ばれていると信じていた兄曹丕からは冷厳な仕打ちを受ける。そして、このような境遇に追い込まれたのは、もとはといえば、父曹操を失望させた数々の粗相と根は同じ、自らの置かれた情況に対する自覚のなさ、読みの甘さ故にであったのだ。

以上、曹植の「贈丁儀」詩を読み解きながら、その成立時期を延康元年の秋と推定した上で、本詩の背景を為す現実と、その状況下における曹植の内的真実とを探ってきた。ここから窺える曹氏兄弟の間柄には、必ずしも従来言われてきたような穏やかさは感受されない。やはり、二人は後継者争いの渦中の人であったと言わざるを得ない。ただし、この問題に対して、両者のスタンスはかなり異質であったように思う。曹丕は間違いなく父の後継者たらんことを目指していた。曹植は、自分を見込んで立ててくれる側近者たちに友情を感じ、その気持ちに報いたいという願いを持っていた。そして、曹植自身は、彼らとの交友を権力とは無縁のところで存続し得ると信じていたらしい。だが、現実はそうではなかった。このことを曹植が思い知るのは、この詩を丁儀に贈って後のことである。

注

(1)近年の論考としては、渡辺由美子「曹操没後の曹丕と曹植―不仲説の検証―」(『二松』第十六号、二〇〇二年)が、この問題に係る先行研究を網羅的に紹介した上で、二人は個人的な関係においては不仲であったとは言えないと論じている。

(2)伊藤正文『曹植(中国詩人選集3)』(一九五八年、岩波書店)の解説を参照。

(3)平野園子「曹植贈答詩考―「贈丁儀王粲」「贈丁儀」を中心として―」(『大東文化大学中国学論集』第二号、一九八〇年)。なお、氏の論考は、本詩に関する諸家の解釈を比較検討した上で、その成立時期を、曹丕が魏王となった建安二十五年(延康元年)と推測している。

(4)伊藤正文「曹植詩補注稿(詩之三)」(『神戸大学文学部紀要』第十二号、一九八五年)に指摘する。

(5)『文選』巻二十四、曹植「贈丁儀」詩の李善注に指摘する。以下、特に記さない限り、典故の指摘はまず李善によって導かれたものである。

(6)王念孫『広雅疏証』巻九に指摘する。

(7)余冠英『三曹詩選』(一九八五年、人民文学出版社。初版は一九五六年)に、「この詩はおおよそ曹丕が王位に就いたばかりの頃に作られたもので、曹植には思いもよらなかったかの一連の迫害が未だ発生しておらず、ただ丁儀がまだしかるべき待遇を得ていないことを見て、彼が心中不安であろうと心配し、そこで詩によって彼を慰撫したのである」と述べられている。本稿は、この説に新たな論拠を書き加えようとするものである。

(8)伊藤前掲書四三―四四頁に、古直『曹子建詩箋』の解釈などに拠りながら、前掲の余冠英説とは異なる見解として、このような説が示されている。

(9)熊清元「曹植《贈丁儀》詩作年辨析」(『学術研究』一九九一年四期)は、前掲の余冠英説を非として、張可礼『三曹年譜』(一九八三年、斉魯書社)を是とし、その根拠としてこう考証する。

(10)ただし、成瀬哲生「曹丕年譜ノート」(『北海道大学文学部紀要』三十一(一)、一九八二年)の指摘によると、曹操の漢中への出征中、鄴を留守していた曹丕は、魏諷事件に連座した王粲の遺児二人を処刑するという、負の恩恵とも言えるような権限を行使して曹操を後悔させている(『三国志』巻一・武帝紀裴注引『世語』、及び同巻二十一・王粲伝裴注引『文章志』)。

(11)張可礼の前掲書は、曹植詩にいう「在貴多忘賤、為恩誰能博」を、曹丕の丁儀に対する冷遇と解釈している。だが、この時期の曹丕はあくまでも魏王の太子であって、その権限は広く世に恩沢を施せるほどには大きくなかったのではあるまいか。

(12)趙幼文『曹植集校注』（一九八四年、人民文学出版社）二〇八頁を参照。

(13)大上正美『思索と詠懐（中国古典詩聚花）』二七―二九頁。

(14)『荘子』山木篇にいう「吾犯此数患、親交益疏、徒友益散（吾は此の数患に犯ひて、親交は益疏く、徒友は益散ず）」の「親交」について、成玄英の疏は「親戚交情」と説明している。成玄英は唐人ではあるが、この語の解釈に時代性を読み取る必要はないように思う。なお、『文選』巻二十四、曹植「贈徐幹」詩に見える「親交」に対して、李善は『荘子』のこの部分を用例に挙げている。

この原稿は、『林田慎之助博士傘寿記念三国志論集』（汲古書院、2012年10月）に寄稿したものです。公刊されたものとは字句に若干の違いがあるかもしれません。
［論著等とその概要］の［学術論文］の№34に挙げたものです。